

【論文】

アクセント核はどう変わるか¹

児 玉 望

How do accent kernels mutate?

KODAMA Nozomi

要旨 (Abstract)

A structuralist account of accent changes in Japanese dialects has been attempted by the present author on the assumption that the proto-system of the Japanese pitch accent as attested in tonal notations in Ruijū Myōgi-shō (類聚名義抄) had a raising, rather than a lowering, kernel as the locus of tonal prominence. This paper focuses on the two possible paths from the erstwhile raising kernel to the lowering kernel which is currently by far the most prevalent in Japanese pitch accent dialects. The path via the descending kernel, which was recorded in philological sources in Kyoto dialect since the 11th century and has been considered as a norm in Kindaichi Haruhiko's account of accent changes to Tokyo-type systems, is not traceable except in and around Kansai and Shikoku areas. Other systems are shown to be better explained by the other path which involves the ascending kernel with advanced pitch rise replaced subsequently by the following pitch fall as the invariable distinctive feature to become a lowering kernel. The overall genealogical tree from the word tone systems of Proto-Japono-Ryukyuan is also revised so that it has a single branch covering all the pitch accent systems as offshoots of the proto-system with the raising kernel.

キーワード (Keywords) : アクセント史 上げ核祖体系 降り核 昇り核 下げ核 ビッチアクセント 語声調
日本語方言

1. はじめに

九州西南部を含む西南日本の諸方言のアクセント体系は、第一次大戦期に長崎方言を分析したポリワーンフ²以来、東京方言のような位置アクセント体系とは異なる類型であることがたびたび指摘されてきた。アクセント記述研究では、早田輝洋(1977)の「語声調」類型や上野善道(1984)の(多型アクセントに対する)「N型アクセント」類型が広く受け入れられている。二つの仮説の大きな違いは、「N型アクセント」が式とアクセントの位置の両方が弁別的な中央式諸方言(近畿・四国に分布)の体系を含まないのに対し、早田説では「式」も「種類の体系」の1種とみなし「語声調」として分析する、という点である。位置アクセントでは語の音節数に応じて弁別的な位置の区別が増えるのに対し、N型アクセントや「式」では語の音節数に関わらず型の数が一定であり、かつ、単に数が同じなだけではなく音節数の異なる各型の間でそれぞれ系列的な関係が観察される、という位置アクセント体系には見られない特徴がある。

一方、琉球諸方言のアクセント記述研究が進み、服部四郎(1958)が北琉球方言の1・2音節語のアクセント対応に基づいて提唱した3類を拡張して、松森晶子(2000)が琉球アクセントの祖体系と

して、3音節語を含めて音節数に関わらない3つの系列が再建できることを提唱した。また、近年は、松森(2016)、五十嵐陽介(2016)など、先島諸島諸方言のようにこれらの系列が連文節環境でのピッチ形の違いとして実現する、位置アクセント体系とは大きく異なる体系が存在することが報告されている。

日本語諸方言のアクセントの系統分岐仮説としては、祖体系として『類聚名義抄』の声点資料に記録された院政期京都方言に近いものが再建できる、とした上でこの体系から諸体系へのアクセント変化をいくつかの「アクセント変化の法則」の組み合わせで説明する金田一春彦(1974, 1975)の説が通説となってきた。しかし、この通説は、服部四郎(1979)に指摘された名義抄式体系では説明のできない琉球諸方言における型の分割をはじめとして、中央式を中心に両側に内輪・中輪・外輪の各体系が分布することをうまく説明できないなど問題も多い。また、上述のような位置アクセント体系とそうでない体系の違いがどのように発生したのかの説明も看過されている。日本語アクセントの祖体系とこの系統分化の過程を、これらの琉球諸方言アクセントからの知見を加えて再検討することが急務となっている。

児玉望(2017)は、日本語アクセントの祖体系として位置アクセント体系が再建できるか、あるいはそうではなく系列性をもつ体系として再建すべきか、語声調と位置アクセントとの間にはどのようなアクセント変化が仮定しうるか、という問題意識を正面に据え、日本語アクセントの系統分岐を再建した試みである。動詞・形容詞のアクセントによる1類と2類の区別が、位置アクセント体系では形態論的な活用クラスにとどまりアクセント型としては系列性をもたないのに対し、西南九州の二型アクセントや琉球方言の二型・三型アクセントにおいてはそれぞれアクセントとしての系列性と一致した活用形アクセントの実現形となることを根拠に、祖体系が表1のような系列性をもつ語声調体系であるとした。祖体系が本来持っていた系列性が位置アクセント化により崩れた結果、位置アクセント方言や隠岐・越前の語声調体系における動詞・形容詞の類別が、活用クラスとしてのみ定義されることになった、と考える。さらに、児玉(2019)では、東京方言をはじめ、九州から東北に及ぶ位置アクセント体系に広く観察される、語末核型の名詞(例：ハナ*が「花が」)がノ付き形で無核(ハナノ「花の/鼻の」)となる現象も、祖体系がもっていた名詞とそのノ付き形との間の系列性(たとえば名詞LLIに対してノ付き形LLL)の痕跡として説明できることを示した。

1-1	X=	2-1	XX=	3-1	XXX=	不昇高結式	琉球A	第1類連体形・名詞化形
1-2	X^	2-2	XX^	3-2	XXX^	不昇低結式	琉球A	第1類非連体諸形
1-3	L	2-3	LL	3-4	LLL	低平式	琉球B	第2類名詞化形
1-4	R=	2-4(2)	LH=	3-5a	LLH=	緩昇高結式	琉球B	第2類連体形
1-5	R^	2-5(2)	LH^	3-5b	LLH^	緩昇低結式	琉球B	第2類非連体諸形
		2-4(1)	RH=	3-6	LHH=	急昇高結式	琉球C	
		2-5(1)	RH^	3-7	LHH^	急昇低結式	琉球C	

(H:「高」 L:「低」 R:「昇」 X:「降」 ~「高平」(不昇) [:上昇 =:Hに平進 ^:非平進)

※ 1-1 ~ 3-7は金田一語類。但し2-4(1/2)と2-5(1/2)は服部(1979)の二分に基づく。

表1 児玉(2017)による日琉祖体系の語声調解釈と名義抄式動詞語形の類別の系列性

児玉(2017)の仮説の特徴は、川上藁(2000)の知見に基づき、位置アクセント体系のほとんどが持っている「無核型」と語声調体系の各系列とをともに「トーン」とみなし、この変化をアクセント核の変化と区別する点である。「トーン」であれば、式対立をもたない体系では有核型との対立が維持される限りにおいてピッチ形は可変的でありうると考えられるので、日本語が日本列島に拡散し

て方言分化がはじまった段階から地方ごとにさまざまな変化がありえたと考える。上野善道（2006）が本土方言アクセント無核型の祖形として再建した「下降式」も、単一の共通祖形と見るのではなく、早くからそのような地域ごとの変異形のひとつとして分布していたとみることになる。表1では、琉球A系列に対応するこの無核型の祖形を「不昇」としてXで示した。琉球B系列とC系列の祖形とみられ、また、東北と九州の外輪式で位置アクセント（アクセント核）が区別される他の系列がもつ（低平式の境界での上昇を含む）上昇と、弁別可能な何らかのピッチ形、という意味である。

1-1	H	2-1	HH	3-1	HHH	無核型高結式
1-2	H]~ F	2-2	H]L	3-2	HH]L	無核型低結式
1-3	L*[2-3	LL*[3-4	LLL*[語末核型
				3-5a	LL*[H	次末核型高結式
				3-5b	LL*[H]	次末核型低結式
(1-3	L*[2-4	L*[H	3-6	L*[HH	語頭核型高結式
		2-5	L*[H]	3-7	L*[H]L	語頭核型低結式
1-4	R	2-6	RH	3-8	RHH	(去声はじまりの語：無核高結式と合流)
1-5	R]	2-7	R]L			(去声はじまりの語：無核低結式と合流)

(H：上声=「高」 L：平声=「低」 R：去声=「昇」 F：東声=「降」]：下降 [：上昇 L*〔：核音節)

表2 児玉（2017）による名義抄体系の上げ核体系としての解釈

1-1・2	柄・蚊・葉	L]	2-1・2	鈴・顔・橋	L]H	3-1・2	形・魚・小豆	L]HH	無核型
1-3	絵・火・目	H*]	2-3	池・腕・草	L]H*]	3-4	表・鉢・袋	L]HH*]	語末核型
						3-5	命・心・姿	L]H*]L	次末核型
(1-3	H*])		2-4・5	海・箸・雨	H*]L	3-6・7	兎・後ろ・葉	H*]LL	語頭核型

(H：「高」 L：「低」]：下降 [：上昇 H*〔：核音節)

表3 九州外輪下げ核体系の類統合< 語例は平山輝男（1960）、平子・五十嵐（2014）から >

このような観点から、アクセント型の日本語諸方言間での対応を精査し、方言間で無核型と有核型が対応する場合については推定される変化がアクセントの発生か消失かを論じ、有核型のピッチ形の違いを、有核型がもつアクセント核に起きた変化の結果として系統分岐の仮説を提示したのが児玉（2017）である。名義抄式体系で次音節で「高」（上声点）が付される「低」（平声点）の音節を、表2に示すようにアクセント核（上げ核）の位置とみなせば、東北と九州（表3に例示）の外輪式体系のアクセント核（それぞれ昇り核と下げ核）に一致することに着目し、アクセント変化では核の位置は変化しにくく、変化したのは核の実現するピッチ形であるとした。語声調体系からアクセント核が発生して位置アクセント祖体系が分岐した段階では、このアクセント核は上げ核であったと考え、名義抄式はこの段階の核の位置と種類を維持していたとみる。この上げ核の発生は、前段階の語声調体系のもっていた2種類の昇調の弁別が、日本語音配列に特徴的な「拍の等時性」が確立した結果として、上昇位置の区別としてしか実現できなくなったものとして説明する。諸方言に無核型として上昇のない平進式や下降式のピッチ形が現れることは、これらと弁別されるべき有核型が上昇位置を区別していたことの反映であるとみる。

児玉（2017）では、位置アクセント祖体系での上げ核が、それぞれ東北地方では昇り核（核の位置で上昇：H*）へ、他の諸地域では降り核（核の位置で下降：L*）を経て下げ核（次音節で下降：H*])に変化したとした。特に後者のうち中央式に近い地域では、(1) 下降式の無核型をもつ諸方言においてこれとの弁別が失われることによる語中降り核の無核化、あるいは逆に、無核型の有核化

(2) 先行語をもたない位置での語頭の降り核の維持が困難であることによる語頭核の脱落（及びこれに伴い先行音節を下げ核と再解釈したことによる核の「一拍前ずれ」）、という変化が組み合わさることにより、近畿・四国・北陸の複雑なアクセント分布が成立したとした。

この「降り核化」は、京都における室町時代以降のアクセント史料で実証され、通説において中央・内輪・中輪の各体系に共通する2-2/3類、3-2/4類の統合をもたらしたとされる「連低類の高起化」を、アクセント核の種類の変化として解釈し直したものである。名義抄式で上昇部をもたない2-2類と3-2類は本来無核型であり、語末音節の下降は核ではなく、後続高起語との間で平進接続しない「低結式」の境界特徴をもっていたと考える。中央・内輪・中輪の諸体系ではこの境界下降が語末音節内部に実現するように位置が固定され、降り核として有核化したことにより、外輪諸体系では失われた無核型高結式・低結式の区別が残存している、という解釈である。

(1) 語末降り核化 (L*[I → lI*) と類統合

2-2/3類：HL/LL*[I → HlI*

3-2/4類：HHL/LLL*[I → HHLI*

2-3類と3-4類の本来の語末上げ核の降り核化は、低結式との合流の有無に関わらず起こりうるので、東北以外の九州・山陰・中部の下げ核化した外輪体系についても児玉 (2017) では地理的な関係を考慮して隣接する中輪式と共通の降り核化を経た体系であると考えた。

しかし、上げ核体系である名義抄式での低結式の語の付属語への接続を論じた児玉 (2019) で指摘したように、語末音節に位置が固定した低結式の下降は、降り核化を経ない上げ核の段階で核に合流しうる。この段階では無核（高起）の付属語は低結式の下降の後で高く接続したと考えられるからである。上げ核体系であれば、核音節に先立つ部分が高いか低いかは型の弁別に関与しないはずである。

(2) 低結式低音節の語末上げ核化

2-2類：HL→HlI* cf. 2-3類：LL*[I

3-2類：HHL→HHLI* cf. 3-4類：LLL*[I

これが正しく、内輪・中輪体系での無核低結式の語末核型への類の統合が降り核化を経ずに起こりえたとなれば、内輪・中輪・外輪の下げ核諸体系を一括して (1) の語末降り核化を経たものとみなす児玉 (2017) の再建は見直しが必要になる。本稿では、上げ核から下げ核への変化の経路としては降り核を経る経路と昇り核を経る経路の2種類がある、という、児玉 (2018) に提案した核の8類型とその通時的な関係の仮説をもとに、それぞれの体系ごとにどちらの経路を経ているとみなせるかを論じていく。

2. アクセント核の8類型

アクセント核は、ピッチ変化を引き起こす力を担う音節として、服部四郎 (1954) で提案された用語である。このアクセント核が引き起こすピッチ変化は東京方言のような下降だけではなく、上昇させる「のぼりアクセント核」が柴田武 (1955) により提案されている。上野 (1975) はさらに、これらの上昇・下降がそれぞれ核音節の先行音節に実現する逆行核と後続音節に実現する順行核の計4種を導入したが、上野 (1989) で、「逆行核」の考え方を捨て、核音節で上昇する「昇り核」(ascending kernel)、下降する「降り核」(descending kernel)、核次音節で上昇する「上げ核」(raising kernel)、下降する「下げ核」(lowering kernel) として、核音節あるいは次音節のいずれかのピッチ変化を引

き起こす力として改めている。

2種類の上昇核、2種類の下降核の間には、それぞれ連続的で中間的な段階がありうるという児玉(2017)の主張を具体化して、児玉(2018)では、上昇・下降をさらに、上昇開始・上昇完結・下降開始・下降完結に区分した8種類の類型を提案して、これらの間の通時的関係を論じた。ここでは、この8類型を、核音節と核次音節の2音節のピッチ形をどのように規定するかという観点から再定義したものを(3)に示す。児玉(2018)の核音節での上昇・下降の開始と核次音節での上昇・下降の完結が含んでいるこの2音節の前後の音節へのピッチ指定を定義から取り除き、代わって、「昇(R)」「降(F)」の曲調指定のない側の音節のピッチ形がどのような可変性の幅をもつかに応じて「無指定(X)」「不昇(nR)」「不降(nF)」を区別する定義とした。上げ核(R, R1)、昇り核(A, A1)、降り核(D, D1)、下げ核(L, L1)のうち、1を付したものが上げ核/昇り核、降り核/下げ核の間の変化の中間に位置づけられる類型である。

(3) アクセント核の8類型

	核音節	核次音節
R	(nR*)(R)	上昇してはならない
R1	(X*)(R)	上昇してもよい
A1	(R*)(X)	上昇しなければならない
A	(R*)(nR)	上昇してはならない
D	(F*)(nF)	下降してはならない
D1	(F*)(X)	下降してもよい
L1	(X*)(F)	下降しなければならない
L	(nF*)(F)	下降してはならない

図1は、核音節と核次音節へのピッチ形がどのように指定されるかを模式的に示したものである。左側の四分円が核音節、右側の四分円が核次音節で、塗りつぶした部分は、ピッチが可変的な範囲である。この範囲は、分節音の種類や核音節の位置に応じて変わりうるが、最大のものを示す。

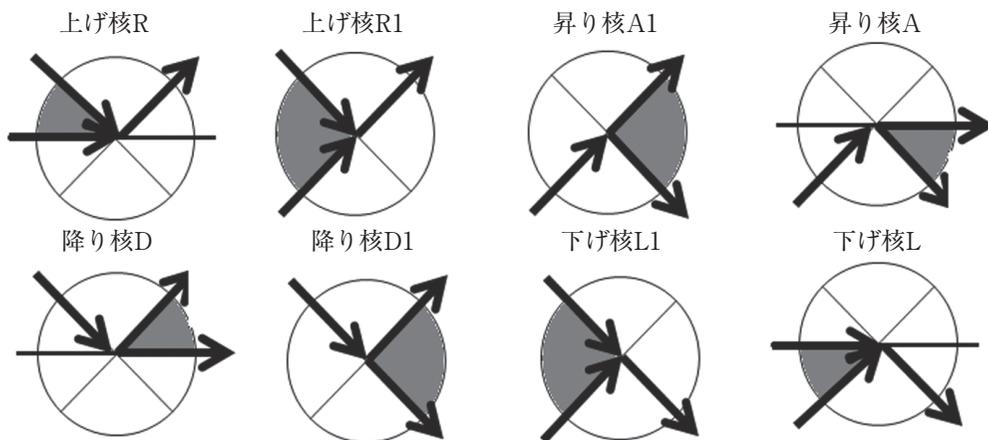


図1

中間類型の4つの核は、2音節にわたって上昇・下降が持続する音声的実現が可能な核であり、弁別特徴としてどちらの音節での上昇・下降が義務的であるかによって核の種類が区別される。図1で

左右に隣接する核の種類の変化は、それぞれ可能な音声の実現に重なりをもっており、音声的に同じであっても弁別特徴の変化によって話者が無自覚なまま構造が変わる、というアクセントのように音法的な対応関係を生じる音韻変化を構造主義的に説明できると考える。同様な音声の実現に重なりをもつ関係は、図1の左側のR, R1, D, D1、右側のA, A1, L, L1の4種類の間の縦方向の変化にも見出される。

図1の隣接で説明できないのが相互に可能な実現形の重なりをもたない上げ核⇔下げ核、昇り核⇔降り核の変化である。したがって祖体系が上げ核体系であったとすれば、現代位置アクセント方言の多数を占める下げ核への変化は、間に昇り核A1か降り核D1への変化のいずれかを経ていると見なければ連続的な変化とならない。しかし、これらの2つの型は、いずれも不安定な部分を含んでいる。語頭核の語は語頭から2音節上昇/下降が連続する実現形をもてるが、この実現形 (R*) (R) / (F*) (F) の、第2音節に核をもつ語 (nR) (R*) / (nF) (F*) との弁別は、第1音節の曲調 (R) / (F) の有無の聞き分けに依存し、高低の段階のみでは共に (低) (高) / (高) (低) となり区別できない。この段階を脱して弁別を容易にするためのさらなる変化が進行しやすいと考えられる。

児玉 (2018) では、山形県大鳥方言について、談話音声資料の分析に基づき、この方言のアクセント核がA1タイプの昇り核型だと分析した。この方言の2音節語では、核の位置の弁別が上記のような語頭音節側の曲調の有無に頼る語頭核型実現形をもつのは第2音節の母音が広い場合にほぼ限られ、第2音節の母音が狭い語頭核型ではAタイプの核として第2音節が不昇の実現形のみが現れる。

この昇り核A1からの変化として想定されるのは、(1) 第2音節の母音の広狭に関わらず核次音節が不昇となる昇り核A (2) 第2音節側に弁別特徴として下降が指定される下げ核L, L1である。大鳥方言の北側には昇り核の外輪式体系が、また、南の新潟県側には下げ核の外輪式体系があり、これらがA1タイプの昇り核まで共通の変化を経た後、それぞれ (1) と (2) を経て分化した、という説明が可能な分布となっている。

昇り核A1から (1) を経たとみられる体系の中には、この変化が語末核を含む一部の環境でのみ起きて、他の環境では上げ核Rのままで留まったとみられる体系がある。このような体系では、語末音節の上げ核がR1を経て昇り核A1になった段階で、この変化を経なかった元のRの核次音節の上昇が昇り核A1に編入されことで核の位置が動き、語末核型と次末核型の語類が統合して昇り核Aとなったとみられる。東北地方の日本海沿岸部の語頭核型が核次音節の母音が狭い場合に限られる諸方言では、語末核に加え核次音節の母音が狭い場合にのみ上げ核R1 への変化が進んだとみられる。これに対して気仙沼方言では語頭核型が語頭長音節をもつ語に限られており、上げ核R1への変化が語末核に限られたと解釈できる。

一方、A1タイプの昇り核と同様の不安定さをもつD1タイプの降り核は、(1) 核次音節が不降となる降り核Dか (2) 核音節が不降となり第2音節側に弁別特徴として下降が指定される下げ核L1 に向かって変化したと考えられる。降り核Dは (1) を経たものかどうかにかかわらず、先行音節がない位置での語頭核の下降の実現が困難であるため、語頭降り核型が無核型化し、代って1-2類、2-5類の語末低結式の語末境界下降が語末核として組み込まれる形で位置アクセント体系が再編され、有核型については同じピッチ形のままで、元の降り核の1音節前の下げ核が対立する体系となったとみられる。これに対して (2) の変化は、(1) のタイプと音形を比べた場合に通説でいう「山の一拍ずれ」を引き起こすが、降り核が下げ核に変化したことによるピッチ形の変化であり、核の位置は維持され

ているとみる。

見玉 (2017, 2018) で内輪・中輪・外輪の下げ核諸体系に一括して想定したのは、(東北外輪を除き)、降り核D1から (2) を経るといふ変化である。次節では、これらの諸体系について個別の体系ごとに昇り核A1を経ているか降り核D1を経ているかを検討していく。

3. 下げ核化の過程

3.1. 内輪式の降り核化

降り核化を経たことが文献によって実証される京都方言を含む中央式諸方言に隣接して分布する内輪式諸体系は、京都方言で起きたものと同一の降り核化過程を経ていると推定可能な下げ核体系である。内輪式が中輪式・外輪式と区別されるのは、位置アクセント祖体系において無核型低結式であったと考えられる1音節語1-2類が有核型となり、無核型高結式の1-1類と統合していない、という点である。この特徴は、中央式と共通であるが、中央式では祖体系で有核型であったと考えられる1-3類の核が、2音節以上の語の語頭核と同様に無核となっているのに対し、内輪式では1-2類は1-3類と統合し、1-3類の核が維持されている。中央式における1-2類の有核化は、2-5類と同様、位置アクセント体系の下げ核体系としての再編に伴う低結式下降の語末核化であるが、内輪式の1-2類の有核化は有核型である1-3類との弁別の喪失によるものである。

これは、この統合が起きた際に内輪式の1-3類の核の実現形が、1-2類の無核型低結式のピッチと似ていた、ということの意味する。1-2類は声点資料で下降調と推定される「東声」の声点が付される例のある型である。低結式に続く無核の付属語は、名義抄体系では高く接続し、低結式ではこれに先立って「音調の谷」が生じることで、平進接続の高結式と区別されていたと考えられるが、京都方言で降り核化が起きたと考えられる南北朝期までには、無核付属語は低結式には低く接続していた(高起付属語の順接化)、と考えられるので、この段階において内輪式の1-3類の核の実現形は核次音節までの下降の継続を許容する降り核D1であったと推定できる。

この降り核D1は、先行音節のない語頭核音節においても音節全体にわたっての下降を維持することができたと考えられ、中央式や垂井式と異なり内輪式で語頭核が核としての性質を維持したことをうまく説明する。さらに、核音節からの2音節にわたる下降が核の位置対立の実現形の弁別性を損なわないように、下降開始を遅らせる下げ核化を経て現在の内輪式が成立したと考えられる。

福井玲 (2016) は、内輪方言である岐阜県萩原方言で、助詞の「も」に終わる文節や動詞連用形が形成する文節を含め、中央式方言との1拍ずれの関係が規則的に成立することを示した。これは、この体系で下げ核に先行した降り核化が、中央式に起きたものとほぼ同一であったことをよく示していると考ええる。

3.2. (内) 外輪式の昇り核化

外輪式は、無核型で高結式 (1-1, 2-1, 3-1類) と低結式 (1-2, 2-2, 3-2類) の弁別を失った体系であり、東北、三河・遠江、出雲・伯耆、豊前・豊後に離れて分布する。平子達也 (2017) は、これをさらに3-6・7類(拙論の語頭核型高結式/低結式) が統合した東北・九州の外外輪式と、統合しない出雲・三河の内外輪式に分けることを提案し、後者はそれぞれに隣接する中輪式と近い系統関係にあるとした。見玉 (2017) も、高結式と低結式の弁別喪失は、複数の経路が想定可能な「起こりやすい変化」であ

り、各地の体系ごとに個別的に起きた改新の結果がたまたま一致したものとして、系統分類としての外輪式を解体する立場にある。本小節で論じる内外輪式の昇り核化を経た下げ核化も、東北の外輪体系とよく似た特徴に基づくものであるが、中央式と内輪式の間想定されるような単一の変化としての昇り核化の存在を主張するものではない。

出雲アクセントと奥羽アクセントの類似については、広戸惇・大原孝道（1953）が語例をあげて詳しく論じているが、簡単にまとめると、語頭核型が第2音節の母音が狭い場合に限られ、語末核型が祖体系で次末核型であったと想定される語類を含んでいる、ということになる。違いは、奥羽の昇り核体系に対して、出雲が下げ核体系である点と、出雲では語頭核型が、母音の条件に加え、さらに祖体系で低結式（2・5類、3・7類）であったものに限られる、という点である。これは、上げ核R1型への変化、つまり、上昇開始の早めがこの方言では語末核と下降が後続する場合の次音節の母音が狭い非語末核にのみ起きた、という前節の東北外輪式とほぼ同じ説明が可能である。出雲方言では上昇が起きなかった核を再編した昇り核A1型の体系からさらに下げ核体系へと変化が進行した、ということになる。

広戸・大原（1953）は出雲アクセントの東西に「中間アクセント」を立てているが、この体系は、語頭核型が中輪式とほぼ共通しているという点で「中国方言的」、無核低結式（2・2類・3・2類）が無核のままである、という点で「出雲方言的」としているの、昇り核化が語末核に限らずすべての核について進行した内外輪体系と呼んでいいと思われる。

三河・遠江の外輪体系についても、柴田武（1981）では、新居町方言の2音節名詞について、語頭核型がほぼ語末核型と統合した、気仙沼アクセントの体系とほぼ同じ類別を載せている。この類の統合も、語末核型にのみ選択的に起きた早い上昇開始による昇り核A1型への体系再編を経た下げ核化で説明できるものである。上げ核体系において、核の上昇すべき次音節を欠く環境にも現れる語末核で上昇開始の早いR1が現れやすいのは、無核型との弁別の維持の観点からも自然な変化である。各地の方言で同様の変化が個別的に起きたと考えても差し支えないと考える。

新居町の周囲の外輪体系は語頭核が維持された下げ核体系であるが、これらの下げ核も、上げ核R1型への変化が語末核に限らず無条件に起きた、という違いだけで、新居町方言と同様に昇り核A1型を経た体系であるとみられる。

出雲と三河・遠江いずれの体系についても昇り核化の根拠としているのは（語頭核型に条件のつくことのある）語末核型と次末核型の類の統合であるが、同じ類の統合は、降り核D1型を経た下げ核化でも可能ではある。この場合、語末核型は下降が核音節内で開始される降り核型にとどまり、他の型で下降開始が遅れる下げ核化が進行する。結果として生じた体系を降り核体系と分析した場合は、やはり語頭核型を欠き、次末核型が語末核型に統合した体系となるはずである。しかし、ここから下げ核体系を生じるためには、再度降り核D1型からの、今度は例外のない下げ核化を想定しなければならない。

従って、語末核型と次末核型が類として統合（2・3・4・5類と3・4・5類）し、非語末核型の核の位置が祖体系と比べて1音節ずつずれている、というような語頭核型が失われる型の統合をした体系の説明として無理がないのは、語末核型のみが昇り核A1型に変化したのちに、元の上げ核が昇り核と再解釈される過程を経たという筋書きである。内外輪の2地域は、共にこのような変化を経た地域の周囲にすべての核が昇り核A1型を経た体系が分布していると考えられる。

3.3.3 音節の語頭核型高結式の無核化

平子（2017）によれば、内外輪式の両体系が東北・九州の外外輪式と異なり、内輪・中輪の諸体系と共通するのは、3-6類全体と3-7類の一部（3-7b類）が無核型となっている点である。東北、九州の外輪式と名義抄式は、昇り核・下げ核・上げ核という核の種類の違いはあるものの、3-6類と3-7類は共に語頭核型であり、これを祖体系と見れば、内輪・中輪・内外輪の各体系は共通に語頭核が無核化する改新を経ていることになる。この地域は、中央式により東西に分断されて分布している。間の中央式・垂井式でもこの類は無核型であるが、中央式では祖体系の語頭核型が音節数に関わらず無核化したのに対し、東西両側の体系では3音節語のみで語頭核型の無核化が起きているのである。このような変化が、降り核D1型を経たとみられる内輪式でも、昇り核A1型を経たとみられる内外輪式でも共通に起きていることは、中央式などで起きたとみられる降り核Dが語頭核として安定しなかったことによる無核化とは関連がないことを示している。

内輪・中輪・内外輪の諸体系の共通の特徴は、3音節語では（祖体系）語頭核型で高結式（3-6類）/低結式（3-7類）の区別を維持していることであり、また、無核化した3-6類が高結式であるということを手掛かりに、このような諸体系でなぜ共通して語頭核が失われたかの一応の説明は可能である。下げ核化の前段階として降り核D1型と昇り核A1型が共通に持っている特徴は、核次音節での下降が、可能な実現形に含まれる、という点である。一方、3-6類と3-7類の弁別は、低結式の実現形としての3-7類語末音節全体の下降に対し、高結式の3-6類では語末音節が不降でなければならなかったはずである。この不降音節に先行する位置で、3-6類語頭核の次音節は、降り核D1型でも昇り核A1型でも、下降調の実現形を持ってなかったとみられる。これらの型の核からの下げ核への移行は、核次音節の下降が任意の実現形から義務的な弁別特徴になる変化であり、このため次音節に下降調の実現形をもたなかった3-6類の語頭核は下げ核としての弁別特徴を獲得できないまま、核としての性質を失った、とみるのである。

この説は、さらに、平子（2017）が指摘している、名義抄式で3-7類であるのに内輪・中輪・内外輪各体系で語頭核型ではなく無核型となる一部の語類、いわゆる3-7b類の無核化も説明することができる。名義抄式では3音節語頭核型はすべて語末音節の下降（平声点）をもつが、この型の低結式は本来語末音節で下降するもの（表2の書式でL*[H]L）と、2音節語頭核型の低結式（2-5類）のように、語末音節まで不降で、語境界の後で下降するもの（L*[H]H）とがあった、と考えるのである。後者が3-7b類であり、この類の語頭核も核次音節で下降する実現形をもつことができず、無核化した、とみる。

長い（音韻）語の低結式が、語の内部構成に応じて2種類の実現形をもつ例は3-7類のほかにもある。たとえば屋名池誠（2004）は、名義抄式で動詞の非連体形は低結式であり、第2類動詞では4音節以上の語形で語末音節が下降する（..L*[H]L）のに対し、それ自体はアクセントを持たない助動詞シムが接続した第2類動詞の動詞形は、第2類動詞と同じ系列となるが、この文節の低結式の語形は4音節以上でも境界下降型の実現（..LL*[H]）となる、としている。3-7b類の区別もこのような語の内部構成が関係しており、中央式では改新として語頭核型低結式のこの区別を失って一元化が進んだ、という分析も可能であると思われる。

3.4. 東日本の中輪式の昇り核化による説明

中輪式については、内輪式のような降り核化を経たとみなすべき積極的な根拠がないが、これをもって降り核化を経していないということはできない。たとえば、1音節名詞の1-2類は無核のままであり無核高結式の1-1類と統合しているが、この改新が降り核化に先行して生じていたという可能性もある。動詞連用形が形成する文節のアクセントで中央式を経っていない平準化のような改新を経ることも、内輪式のような中央式と共通の降り核化は否定できるかもしれないが、中央式よりずっと早く降り核化が起きたという可能性³は残る。降り核化を否定するためには、下げ核化に先立って昇り核A1を経ていることを積極的に支持するような証拠をあげていく必要がある。本節では、決定的とはいえないまでも、東日本の中輪式の下げ核化が昇り核型A1の段階を経ていると考えることでよりよく説明できそうな事実を挙げていく。

まず、無核1音節名詞の有核化の例として、名義抄式では去声の声点が付されており、上昇調の音形であったと推定されている高結式1-4類と低結式1-5類が挙げられる。これらが有核型の1-3類と合流していることは、この段階での核音節の実現形として音節内での上昇開始が可能なA1タイプの昇り核であったとする根拠となる。問題は、この両類は語例が少なく、日常語に残存して方言間で比較可能な語が1-4類で「巢」、1-5類で「菌」に限られており、個別の語で起きたアクセント変化の可能性を排除できないことである。たとえば、「巢」は『全国アクセント辞典』（平山輝男1960）では東京方言形として有核と無核の両型が併記されている。しかし、杉藤美代子（1998）所収の音声資料では、東日本の外輪および中輪体系の24地点のうち「巢」が無核形で出ているのは東京・豊橋の2地点だけで、残る22地点では両語とも有核と考えられるピッチ形が聞かれる。低結式の「菌」のみが有核となる中央式・内輪式との違いは明白である。

次に、隣接する他の体系との関係を検討する。降り核Dで語頭核が失われやすいとすれば、降り核化を経た下げ核体系の周辺には、内輪式体系に隣接して中央式や垂井式が分布するように、語頭核を失い一拍ずれが起きなかった体系が分布しやすいと予想される。しかし、東日本の中輪式体系の周辺には語頭核型（1-3類、2-4・5類、3-7類）が無核化した体系が見当たらない。よく知られている近隣の特殊な体系は、奈良田方言や蓮田方言のような上げ核体系である。これらの体系は周辺の中輪式体系と同じく無核型低結式（2-2類、3-2類）の有核化を経ているので、周辺地域と共通の下げ核化の過程が、何らかの阻害要因により中断したという仮定のもと、それが何であったかを奈良田方言を例に検討する。

上げ核体系としての奈良田方言で特徴的なのは、東京方言で句頭の上昇と呼ばれる、アクセント型の弁別には関与しないイントネーション上の特徴とよく似た機能をもつとみられる句頭音節の「高」であり、語頭核型以外では次音節が急激な降調になる。この区別は、下げ核体系の東京方言の語頭核型以外の語で句頭の2音節が「低／高」の上昇となるのと高低が逆転した鏡像的な関係にみえるが、厳密にはそうではない。東京方言では「高」に聞かれる語頭核型の句頭音節でも音節全体として昇調となるので、句頭の上昇は有核型では語頭核型を含めて句頭音節の「昇」調であると言ってよい。これに対し、奈良田方言の句頭音節は必ずしも「降」調ではなく、句頭音節の上げ核による次音節の上昇は、高い位置からはじまる。このため、『全国方言資料』の談話音声や、小西いづみ氏のWeb公開音声資料（『いづこに』）では、句頭の語頭核型は語頭2音節が高く聞こえる発話が多い。

この句頭の「高」は、上げ核体系において、無核型・核の先行音節・核音節（図1のR, R1参照）

に等しく配置できる句頭降調にはじまり、下降開始を遅らせることで安定させたものだと考えることができる。この説明は、内輪式の降り核D1から下げ核Lへの下降開始が遅れる変化の説明とよく似ている。しかし、内輪式での下降は核の弁別特徴であるのに対し、奈良田方言では語の弁別には関わらない句の特徴としての下降であり、この方言が周辺方言とともに降り核化へ向かったとすれば核との混同を避けるためにむしろ消えていたと考えられる特徴である。これに対して、周辺方言がRからR1へと昇り核A1方向への変化を遂げていたとすれば、句頭の「高」が昇り核化による上昇開始の早まりを（少なくとも句頭の語頭核においては）阻み、昇り核から下げ核へ変化した周辺方言との分化を促したとして説明できる。

関係が問題になるもう一つの隣接する体系は、東北外輪式で、中輪式に隣接する新潟県の外輪式は下げ核体系である。外輪式と中輪式の定義上の違いは、祖体系の無核型低結式（2-2類、3-2類）が無核型高結式（2-1類、3-1類）と統合するか、語末核型（2-3類、3-4類）と統合するかであるが、新潟県全体を調査した上野（1982）によれば、この型に属する語がどちらの型になるかに応じた等語線は、一つの太い東ではなく、新潟県内で波状的な分布を示す。これは、外輪・中輪両方言の間に継続的な語形の流入があったことを示すと思われるが、この前提となるのは両者が共通の体系をもっていることである。このような接触が両方言が共に下げ核体系化してから開始された、という解釈も不可能ではないが、両方言の下げ核化が共通の変化（昇り核化）を経ていたと考えたほうが、そのような語形の流入の継続性をより説明しやすいと考える。

3.5. 中国地方の諸体系の昇り核化による説明

3.2節で内外輪体系として論じた出雲方言・中間方言は、岡山県の内輪体系とともに、中輪体系の分布を鳥取県側と中国地方西部に二分する分布となっている。隠岐諸島には、位置アクセント体系のすべての核が位置アクセントとしての性質を失い、複数の無核型が区別される式体系（語声調）となった諸体系が分布する。広戸・大原（1953）は、中間アクセント（内外輪式）と中国アクセント（中輪式）の緩衝地帯として、無核低結式の無核・有核の語彙分布を詳述しており、この境界においても新潟県の外輪体系と中輪体系の境界地域と同様な語形の流入があったものと考えられる。

一方、祖体系で昇調であったと推定される「巢」と「歯」については、中国地方の内外輪体系・中輪体系に共通して「巢」が無核、「歯」が有核となっていることが、広戸・大原（1953）の語例や杉藤美代子（1998）所収の音声資料からうかがわれる。この分布自体は内輪式・中央式と共通であるが、「歯」が無核低結式の1-2類に編入されて降り核から下げ核体系への再編に伴い有核化したと考えられるこれらの諸方言と異なり、内外輪体系・中輪体系では1-2類が無核のままであるので、「歯」の有核化を低結式の下降に結びつけることはむずかしい。

東日本の中輪式の「歯」「巢」の有核化と同様に、中国地方の内外輪体系・中輪体系「歯」の有核化を昇り核化した1-3類への合流で説明するとすれば、この段階での1-3類の核は、「歯」と同じく、そして「巢」とは異なり、後続の核次音節の下降を伴う核音節内上昇として実現した、ということになる。昇り核が同時に下げ核的な性格を帯びることになるが、先行する上げ核Rが核次音節に環境によっては上昇下降調を要求していた場合など、R1での上昇開始の早まりが上昇に引き続いた下降の開始を早めるような変化であれば、昇り核A1から下げ核Lへの変化の進行が速やかに進んだと想定することは可能である。3.2節で上げた、出雲アクセントでの語末核以外での昇り核化が核次音節の

狭い低結式に限るのも、低結式のような下降が後続する環境での上昇下降調の要求が関わっているかもしれない。中国地方には広戸・大原（1953）が記述する東伯・因幡方言のように、核音節側で上昇し次音節で下降する一拍卓立型の下げ核の実現が聞かれる方言が多いが、この核音節側の上昇が先行する昇り核化の痕跡とみなしうるかどうかの検討が必要である。

「齒」の1-3類への合流は、隠岐の諸方言にも共通する変化である。隠岐の諸体系は、類の統合の点でも語声調体系としての類型の点でも福井県の諸体系に似ているが、隠岐では福井と異なり1音節無核型低結式（1-2類）が中輪式と同様に高結式（1-1類）と統合している点が特徴であり、中輪式と同様に隠岐でも昇り核化によって「齒」の有核型との類統合を説明する必要がある。この事実は、児玉（2015, 2017）の隠岐の語声調化の降り核化による説明にも見直しを迫るものである。この説明は、隠岐諸方言では上げ核体系の段階で無核型が下降調に実現する体系であったため、降り核化した有核型が、語頭核型は中央式のような不降トーンに、それ以外の有核型は下降式の無核型と合流して核の位置に応じて急降・緩降の2種類の下降トーンに分化し、3種のトーンが対立する語声調体系となった、とするものである。語頭核以外の有核型が下降式無核に合流するという説明は、この変化を核の弁別特徴が上昇から下降へ転換した結果として見るものであり、降り核化の代わりに内外輪式・中輪式と同様な昇り核化を経た下げ核化を使っても同様に説明することができる。しかし、昇り核を経た下げ核化では語頭核が残ることになり、語頭核・次核・次々核以降という下げ核の位置の3項対立が、不降・急降・緩降のトーン対立にどのように変質するか新たな説明が求められる。

隠岐の体系との関連でも興味深いのは、山口県萩市の沖合の日本海の見島方言である。この方言は、岡野信子（1970）が報告しているように、この時代までに、特に有核型を中心に、対岸の中輪式の語形の流入があったと見られ、アクセント型の語類対応が崩れている。たとえば、「巢」と「齒」はこの方言でも中輪式と同様に前者が無核、後者が有核であるが、語類の統合の点では「巢」が1-3類に合流したことになり、この変化が見島独自の史的变化の結果であるのか中輪式語形の借用に因るのかの判断がつかない。しかし、祖体系で語頭核型だった1-3, 2-4・5, 3-6・7類は、やや特殊な無核型として本来の語類をある程度保っている。上野（1992）によれば、この型は、3音節以下の名詞は単独では不降であるが、付属語が接続して3音節以上になると文節の4音節目では下降するのである。岡野（1970）によれば、4音節以上の語では同じく第4音節で下降する型が調査語彙の大多数を占めるようになるとしており、この第4音節の下降はアクセントによるものではなく、無核語のトーンの実現と見てもよいようである。

一方、1音節と2音節の祖体系の無核型（1-1・2類、高結式2-1類）は見島方言で有核となるものが多く、祖体系の語頭核型に由来する無核型とは区別される。これに対して3音節語では祖体系の無核型高結式（3-1類）と語頭核型（3-6・7類）が共に無核型となる。これは、この体系でも先行段階では無核型が下降トーンであり、上昇核から下降核への転換が無核型の有核化を促したことを物語るとみられる。有核側への統合か、無核側への統合かの違いはあるが、無核型がどの型と統合したかが語長によって異なるのは、見島方言と隠岐の諸方言との共通点である。語頭核型が無核となることは降り核化の結果とみることもできるだろうが、隠岐の事例は昇り核化を経た下げ核化でも語頭核型が無核化しうることを示しており、現段階ではこの体系が経たのがどちらの過程であるかの判断は保留する。

見島方言が降り核化を経た体系であったとしても、その降り核化が対岸の中輪式体系が経た変化と共通とみてよいかどうかの判断は、現段階では困難である。同じことは隠岐と中輪式との関係について

てもいえることであるが、海を隔てて40キロ以上の距離が近代以前の段階において近隣といえるかどうかは、各時代を通じての人口流入の規模にもよるからである。

西日本の中輪体系は、海を隔てた四国南西部にも分布しているが、系統史的にはこれらの諸方言が中国地方の中輪式と同じ系統分類を成すとみるべき積極的な根拠はないと思われる。これらの体系がどのような過程を経て下げ核化したかの解明には周辺諸体系との比較を含めた詳細な分析が必要である。

3.6.九州地方の諸体系の昇り核化による説明

九州には豊前・豊後地域に外輪体系が分布する。外輪体系として、無核型低結式（1-2類、2-2類、3-2類）は高結式と合流しており、この類の2・3音節が語末核型（2-3類、3-4類）と合流した中輪式のように、「連低類の高起化」を経たとする積極的な根拠はないが、隣接する中輪式の経た変化が及んでいる可能性があるとして、児玉（2017）では中輪式同様に降り核化を経た体系に含めた。平子・五十嵐（2014）によれば、豊後の杵築方言で「巢」「齒」は東日本の外輪・中輪体系と同様に共に1-3類と合流して有核型である。

この外輪式の九州側には、筑前式の体系がある。児玉（2017）では、この体系や、その沖合の壱岐・対馬の諸体系が、外輪体系や本州・四国の他の体系と同様に、共通の上げ核祖体系からの分枝とみることでできるかどうかの判断を保留した。これは、これらの体系を下げ核体系と見た場合、語末核型を欠き、核の位置が必ずしも固定しておらず、有核語が環境に応じて無核化することがある、といった通常的位置アクセント体系とは異なる特徴をもっているからである。児玉（2017）では、位置アクセント体系の語声調体系からの分化を、日本語が日本列島全体に分布を広げる前の段階での九州で起きた変化であるとみており、筑前式や壱岐・対馬諸体系のアクセント核の不安定さを、アクセント核が確立して位置アクセント体系が確立する以前の段階の残存である可能性を考慮した。

しかし、これらの不安定さは（1）下げ核化に伴い下降式の無核型が有核型と合流（2）九州方言に特有の語末境界下降と語末核型の合流 といった変化で、本来核ではない下降が有核型の下降と合流するという改新の結果としてみることもできる。この可能性を、筑前式と壱岐・対馬諸体系を豊前・豊後の外輪体系と同様に、上げ核体系からの下げ核化として分析することにより示す。

また、九州西南部の二型アクセントについては、児玉（2017）で、位置アクセント化を経ていない琉球三型祖体系からの型の統合による説明（この場合、琉球祖体系の分岐も九州で起きたことになる）と、位置アクセント化して獲得したアクセント核が再び無核化して発生したという両様の分析が可能であり、現在の二型諸体系には双方が含まれている可能性もあることを述べた。ここでは、後者の経路について、筑前式及び壱岐・対馬諸体系と同様に、上げ核体系からの変化としての経路を示し、これらが外輪祖体系や筑前・壱岐・対馬と共通の下げ核化の過程である可能性について論じる。

まず、筑前式と壱岐・対馬諸体系を分析する。これらの体系は、以下のような共通の特徴をもっている。

（4）筑前式と壱岐・対馬諸体系の共通特徴

- a) 1音節語（及び対馬では語末母音が狭い2音節語）で型の区別がない。
- b) 動詞・形容詞で1類と2類が統合し型の区別がない。
- c) 2音節語では上げ核祖体系の有核型について、語末核型（2-3類）と語頭核型（2-4・5類）の

区別が保たれる。前者は無核化し、後者は語頭核を保持する。

児玉(2017)では、cのうち、特に上げ核体系としての語末核型、つまり、語末まで上昇がなく、後続語の冒頭で上昇する音形をもつ核が無核型として安定していることに着目し、同じ音形でも核の位置が上げ核体系とは異なる体系として語末音節まで上昇がない音形を無核とする昇り核体系を想定し、筑前式と壱岐・対馬諸体系がこの体系に由来する可能性があるとした。この説明では上げ核体系としては語頭核型となる音形は昇り核体系では次音節に核があることになり、これがなぜ現在語頭核型で現れるかがうまく説明できない。本稿では外輪体系と同じく上げ核体系を祖体系とみた場合の語末核の無核化の説明を試みる。

(4)のa～cはいずれも「境界下降」に関わると見られる改新に結び付けられる特徴である。「境界下降」は、文節末や文節内部の語末に現れる下降であり、次末音節の「高」に続く末音節の「低」として、あるいは末音節の「高」に続く下降として現れる。後続の文節と音韻句として統合する場合には下降が現れずに平進する場合もある。位置アクセント体系において特定の音節が担う「核」とは性質の異なる下降であり、熊本方言など九州の無アクセント方言においても観察される。語末音節に現れるこの下降と語末核の区別は困難であるとみられ、語末核型と無核型は無核側に統合している。特徴bの動詞の1類と2類の区別は、前者が無核型、後者が次末核型を基本とする対立が予想されるが、動詞の活用語形の多くが狭母音で終わり、無核型の境界下降を伴う実現形と次末核型の音形の弁別が困難であることが類の統合を促したと思われる。

一方、上げ核祖体系の無核型(2-1類、2-2類)は、筑前式と壱岐・対馬諸体系で語頭核型かあるいは語末核由来の無核型のいずれかに統合する。無核型と語頭核型の統合は、無核型が下降調となっており、上げ核から下げ核への転換で語頭核型との弁別ができなくなったことを示している。とすれば、語頭核型に統合したのがどんな無核型であるかは、それぞれの体系で無核型がどんな音形であったかある程度反映するものであると考えられる。たとえば、壱岐北西部の諸方言では3音節語も含め、無核型が有核型に統合するが、筑前式では語頭核に統合するのは語末の母音が狭い場合で広い場合は多くは語末核型と統合した無核型となる。統合の結果が、下降位置の固定した有核型となったのか、あるいは下降調の無核型となったのかの判断が難しい場合が多いのもこれらの方言の特徴でもある。複合語の要素境界での下降は下降位置が安定しているようであるが、音声資料で語頭核であるのか次音節核であるのかの揺れが観察される語もある。対馬方言は、語末下降のある不降式と下降式の2つの無核型が対立する一種の語声調体系と分析できるかもしれない。しかも、この方言の音声資料では3音節以上の語では下降式と不降式の間での揺れも観察され、長い語では基本的に不降式の無核型となるようである。

坂口至(1987)が報告している延岡市島野浦島の体系は、外輪式を隔てて北側の筑前式や壱岐・対馬諸体系とよく似た体系である。1音節名詞で有核・無核の対立を保持しているが、(4)の特徴bとcは共通である。この体系では、2音節名詞の無核型は語末核型と統合して語末核型となる。語末母音が狭い場合は助詞に平進接続する平板型で実現するとされるが、出雲方言のように、狭母音に置かれた下げ核の下降開始が遅れる体系であり平板型ではなく語末核型の実現として分析できる可能性もあるだろう。3音節名詞でも無核型と語末核型について同様に統合して語末母音に応じた「平板化」が言及されている。この体系では、先行する上げ核体系の段階で無核型が語末境界下降をもつ不降式であったと推定される。

以上のような観察から推定されることは、九州の外輪式と筑前式や壱岐・対馬諸体系が共通して経た上げ核から下げ核への核の変更は同時期に起きた同一のものであり、体系の違いは、先行する段階での無核型の実現形の違いを反映するものだろうということである。外輪式の無核型は、不降式で境界下降をもたないものだったと推定できる。ただし、この下げ核化に先行して降り核化が起きたかどうかを判断する材料は少ない。外輪式を含めこれらの体系がみな安定した語頭核型をもっていることは、降り核化を経たことを支持するような根拠がない、ということではあるが、かといって昇り核化を経たとみなすべき積極的な理由もない。

これに対して、九州西南部の二型アクセント体系は、上げ核体系から生じたものだとすれば、語頭核型を失った体系であるとみることができる。木部暢子(2010)は二型アクセントを祖体系のもっていた式対立と下降核のうち、式対立のみを残して下降核がすべて失われる変化としたが、祖体系の「式」を下降の有無とし、核が上げ核であった、という見方をすると、残ったのは式ではなく無核型と有核型の区別であり、有核型での核の位置対立をすべて失ったために核が位置アクセントを実現するという核としての性質を失い、2種類の無核型が対立する式体系となった、と考えることになる。このような位置対立の減少を引き起こすような変化の可能性について、降り核化と昇り核化を検討する。

九州北西部の二型アクセント体系では、上げ核祖体系の無核型に対応するのはほぼ一貫して下降式無核型(A型)であり、有核型に対応するのはさまざまなタイプの不降式無核型(B型)である。B型は、たとえば坂口(2001)の記述する長崎方言では語末音節のみが高い語末昇り核型的なピッチ形となるが、木部(1988)の記述する加津佐方言ではこの語末の「高」が境界上昇というべき限られた環境での出現となっている。平子・五十嵐(2016)で記述される佐賀県杵島郡と藤津郡の杵藤方言では、B型が東京方言下げ核体系の語末核型に似た、語頭音節のみが低く付属語が接続すれば付属語側で下降するピッチ形が東側の話者で観察されている。

これらの体系で一貫しているA型の下降式が上げ核体系での無核型の実現形を引き継いでいると考えた場合、他の地域で同様な下降式をもつ体系が経た変化と比較することができる。このような下降式無核型をもつ体系に、降り核化(あるいは下げ核化)のような変化が起きた結果と想定されるのが、福井県や隠岐の諸体系の語声調体系である。語声調化という点では九州の二型アクセントと似ているが、これらの体系では、上げ核体系の無核型が語頭核型を除く有核型と統合する形で型の再編が起きている。このような場合を除いて、降り核化による語頭核型の無核化は、それ自体で有核型の位置対立に影響を及ぼした例は観察されない。

二型アクセント体系で上げ核体系の無核型が有核型との型の再編を経ておらず、有核型で大きく型の数を減らしていることを、上記のような他地域での降り核化による変化と照らし合わせると、この方言では降り核化や下げ核化といった上昇核から下降核への変換が起きていないだろうと考えてもよいと思われる。この点については、九州西南部の二型アクセントでは「連低類の高起化」が起きていないとする児玉(2014)で既に述べた考え方を踏襲する。

一方、3.2節で述べたように、昇り核化を経た体系の中には、昇り核化が語末核を含む一部の環境でのみ選択的に起きたと考えられる体系が複数存在する。この中で、昇り核化が語末核に限られたとみられる東北外輪式の気仙沼方言や、中部内外輪式の新居方言では、2音節名詞に限れば型の統合が二型アクセントと同じ(2-1・2類対2-3・4・5類)である。このような体系で起きた有核型の減少は、

語末核以外の型で位置が1音節後方にずれたことによる次末核型と語末核型の統合によるものであり、3音節以上では語末核と（一拍ずれにより生じた）次末核の位置対立が関わる複数の有核型が維持されたはずである。しかし、九州では、さらに核の位置対立を減らす要因として、筑前式や壱岐・対馬諸体系に見られるような語末核の境界声調化があったと考えられる。この変化が、次末核型と語末核型の位置対立を無効化し、3音節までの有核型がそれぞれ1種ずつしか存在せず、核がピッチ変位の位置対立を担うという核としての機能を失った体系として、二型アクセントが成立したという解釈も可能であると考ええる。

筑前式と二型アクセントの分布は、現在は弁別的アクセントを失った方言によって隔てられているが、この弁別の喪失はおそらく二型アクセントの二型の対立の喪失によるとみられ、二型アクセントと筑前式もかつては隣接していたと考える。二型アクセントが部分的にはあれ昇り核化を経ているとしたら、この変化は筑前式やそれに隣接する外輪式にも及んでおり、これらの体系ではさらに昇り核の下げ核化が進行して現在の位置アクセント体系の分布が成立した、と考えることができる。

4. まとめ

通説とは異なる観点からの日本語アクセントの系統分化再建の試みである児玉（2017）においては、通説のアクセント変化仮説で重要な「連低類の高起化」を核の種類の変更として「降り核化」とした上で、「昇り核化」を経たと主張した東北外輪体系以外の体系の下げ核体系への変化には、そのまま援用した。本稿では、この「降り核化を経た下げ核化」を「昇り核化を経た下げ核化」と分析できる可能性について、各地の主要な体系ごとに分析した。特に、九州については、その過程で児玉（2017）では判断を保留していた諸体系についても、九州外輪体系や本州・四国の諸体系と同様に上げ核祖体系から分枝した系統群とみなしうることを示した。

四国南西部のほか、佐渡、能登、熊野など言及できなかった体系もあるが、必要なデータがそろえば同様の手法で系統史に位置付けることが可能であると考ええる。この分析の結果、「降り核化」は、中央式・垂井式と内輪式およびその周辺の讃岐・越前・加賀の諸体系を含む、日本の中央部で起きた改新による分枝にのみ実証される変化であり、その他の体系の下げ核化については地域ごとに別の説明が可能である、ということになる。

児玉（2018）に掲載した系統樹にこの結果を反映させたものを図2に示す。特に無核型のピッチ形の変化を中心とするアクセントの分化は、日本語がそれらの地域で話されるようになってから直ちに開始しただろうということを、ピッチ祖体系からの分枝で示している。枠で囲んだ改新は、複数の枝に共通して起きたと考えられる改新である。ただし、「降り核化」のように単一の改新が隣接地域に伝播する形で広まったとみるものと、同じ改新が個別的に起きたと考えるものの表示上の区別はない。枠で囲まなかった改新は、単一の枝にのみ想定される局地的な変化である。ただし、中央式のいわゆる高起式と（語頭降り核による下降がレジスターに変質したことによるとみられる）低起式の「式対立」については、図上では単一の分枝としたが、近畿と四国の広範囲に及び必ずしも均質ではない可能性のある改新として枠で囲んだ。

図示しなかった個別的改新のうち、最も重要なものは、日琉祖体系には再建した高結式と低結式の境界特徴による弁別の喪失である。この境界特徴は、高く終わる語が後続の高くはじまる語に接続する場合にのみ発現したと考えられ、弁別喪失の経路としても複数の想定が可能であり、個別的に失わ

れやすかったとみる。むしろ、低結式を位置の固定した下降で実現したことが、多くの場合「核」へと変質することでこの弁別の維持を可能にした改新であった、と考え、この改新（「無核低結式下降固定」）のほうを図示している。

本稿で論じた個別的变化のうち、語末核のみで進行した昇り核化による語頭核型の消失・語末核型と次末核型の統合と、3音節語頭核型高結式（3-6類）の語頭核の無核化とは、図2には表示しなかった。前者は、東北外輪・中部内外輪・出雲内外輪のそれぞれ一部と九州二型で起きた変化である。後者は、内外輪・中輪・内輪の各体系で起きた変化である。本稿で言及しなかった讃岐・加賀の改新については児玉（2017, 2018）を参照されたい。

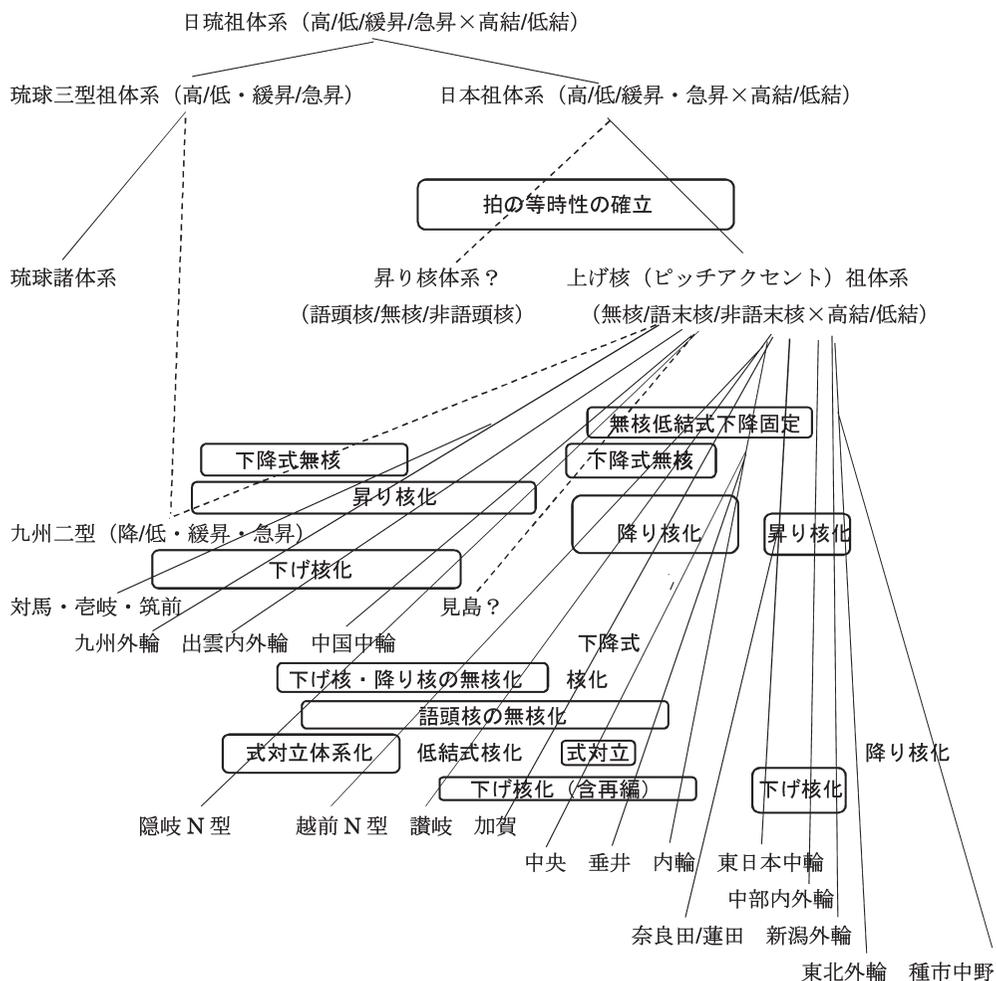


図2

通説の再建法とのもっとも大きな違いは、アクセント変化を、アクセント核とそれをもつ有核型の音形の変化と無核型の音形の変化とに完全に二分したことである。アクセント核をもつ語の音節配列の中で卓立した点を維持するために、有核型では核以外の部分の音形にもある程度の制約がある。しかし、無核型は有核型との弁別が維持される限り、より大きな可変性をもつ。上げ核体系の有核型との弁別の維持は不昇型であれば平進であれ、下降調であれかまわない。しかし、個々の体系がそれぞれ

れの時代にどの範囲の実現形をもっていたかは知りようがない。推定できるのは、無核型が有核型と統合した場合で、この段階でのピッチ形は、統合した有核型の音形からそれに似たものとして推定するのである。一方、アクセント核の変化はゆっくりとしか進まないが、同じ種類の核をもつ体系であれば、一つの体系ではじまった核の変化は、地理的に隣接する地域に方言境界を越えて伝播しえたらろうと考える。また、語頭核や語末核が他の核とは異なる変化を経る場合もあるが、原則としてアクセント核は語長や語の内部の位置に関わらず斉一的な変化をしたと考えられる。外輪式・中輪式・内輪式は主としてこのような斉一的な核の変化が生じた体系であり、分布が広く、距離が隔たっていても相互に共通点が多い。これに対して、下降核化により下降式の無核型と有核型の統合を経た体系は多様であり分布の狭いものを含んでいる。

図2の「下降式無核」は、下げ核なり降り核なりの下降をもつ有核型との弁別を失う可能性がある音形である、ということを行っているだけで、同一の何らかの特定の音形を示しているわけではない。共時的な体系記述においても、諸方言に観察される下降タイプの無核型には、下降の位置が固定しているかどうか、下降が必須であるか随意的であるか、下降語のピッチ形が下降の継続か、あるいは平進に戻るか、といったさまざまなタイプがある。無核型がどのような可変性を持ちうるかの理解は、位置アクセント体系ではない語声調体系の分析においても重要な点であると考えられる。

九州の諸体系については、児玉（2017, 2018）から特に大きな変更がある。児玉（2017）では、語声調体系から位置アクセント体系である上げ核の確立と、琉球3型祖体系への語声調体系の類統合という2つの改新を想定し、九州のみにこの2つの改新のいずれをも経ていない体系がある可能性を考えた。このことから、これらの両方の改新が日本語の分布が日本列島全体に拡大する前の九州で起きた、という可能性を指摘した。本稿では、九州のすべての体系が上げ核祖体系への改新を経ている可能性がある、という分析になっている。本土の諸体系がすべて上げ核祖体系の系統群から成り、この系統群に属さない琉球諸体系が琉球諸島にのみ分布しているのだとすれば、上記の二つの改新が特に九州で起きたとすべき根拠はなくなる。あるいは、日本列島外で起きた改新であり、日本列島への日本語の流入が2回以上あった、という可能性も視野に入れなければならない。九州の二型体系の少なくとも一部が上げ核祖体系ではなく、琉球三型祖体系の系統群であるとすれば、児玉（2017）の九州系統分岐説が維持できる。このような観点からも、未詳とした九州の語声調体系のさらに詳細な比較言語学的研究が重要であると考えられる。

注

- 1 本研究はJSPS科研費（課題番号15K02484）の助成を受けたものである。
- 2 クルトネ、シチエルバに師事しソシュールより早く構造主義的分析を日本に持ち込んだE.D.ポリワーフの見解と、当時の日本での反応については児玉（2020）参照。
- 3 通説の原型ともいべき服部（1937）においては、「乙種方言」では「京都よりずっと早い時期に」その後の京都で起きたのと同じ変化（ここでいう降り核化）が起きたとしている。

参考文献

- 五十嵐陽介（2016）「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150. 33-57.
上野善道（1975）「アクセント素の弁別的特徴」『言語の科学』6. 23-84.

- 上野善道 (1982) 「新潟県における中輪・外輪両アクセントの境界線」『金沢大学文学部論集 文学科篇』 2. 49-85.
- 上野善道 (1984) 「N型アクセントの一般特性について」『現代方言学の課題 2 記述的研究編』 明治書院. 167-209.
- 上野善道 (1989) 「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻』 (上). 178-205.
- 上野善道 (1992) 「見島方言の付属語のアクセント」『日本海域研究所報告』 24. 157-168.
- 上野善道 (2006) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』 130. 1-42.
- 岡野信子 (1970) 「萩市見島方言の語アクセント」『国文学研究』 6. 141-154.
- 川上葵 (2000) 「日本語アクセントのトーン性」『音声研究』 4 (3). 28-31.
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究—原理と方法』 塙書房.
- 金田一春彦 (1975) 『日本の方言 アクセントの変遷とその実相』 教育出版株式会社.
- 木部暢子 (1988) 「二型アクセントにおける助詞・助動詞のアクセントについて—長崎県加津佐方言」『人文学科論集』 28. 47-62.
- 木部暢子 (2010) 「方言アクセントの誕生」『国語研レビュー』 2. 23-35.
- 児玉望 (2014) 「九州におけるアクセント変化の再建—境界特徴に着目して」『音声研究』 18-3. 27-42.
- 児玉望 (2015) 「隠岐3型アクセントの再検討」『熊本大学言語学論集』 14. 1-36.
- 児玉望 (2017) 「アクセント核はどこから来たか」『ありあけ 熊本大学言語学論集』 16. 1-34.
- 児玉望 (2018) 「東北地方の二つの方言の韻律分析—「アクセント核はどこから来たか」補説」『ありあけ 熊本大学言語学論集』 17. 27-52.
- 児玉望 (2019) 「無核ノ付き形のピッチアクセント方言への継承」『ありあけ 熊本大学言語学論集』 18. 29-79.
- 児玉望 (2020) 「日本語アクセント史の再建をめざして」長田俊樹編著『日本語「起源」論の歴史と展望—日本語の起源はどのように論じられてきたか』 205-225. 三省堂. (近刊)
- 坂口至 (1987) 「延岡市島野浦島の二拍名詞アクセント」『文献探究』 20. 52-58.
- 坂口至 (2001) 「長崎方言のアクセント」『音声研究』 5 (3). 33-41.
- 柴田武 (1955) 「日本語のアクセント体系」『国語学』 21. 44-69.
- 柴田武 (1981) 「東海・北陸地方方言の特徴」『全国方言資料』 (第3巻東海・北陸編) 日本放送協会
- 杉藤美代子 (1998) 『日本列島ことばの探検 全国編：マルチメディア方言ライブラリ』 富士通ビー・エス・シープロダクツ&サービス事業部
- 日本放送協会編 (1999) 『CD-ROM版全国方言資料』 日本放送出版協会.
- 服部四郎 (1937) 「原始日本語の二音節名詞のアクセント」『方言』 7 (6). 44-58.
- 服部四郎 (1954) 「音韻論から見た国語のアクセント」『国語研究』 2. 2-50.
- 服部四郎 (1958) 「奄美群島の諸方言について—沖繩, 先島諸方言との比較—」『人類科学』 XI. [服部 (1959) 275-294に再録]
- 服部四郎 (1959) 『日本語の系統』 岩波書店.
- 服部四郎 (1979) 「日本祖語について (21)」『言語』 8 (11). 97-107.
- 早田輝洋 (1977) 「生成アクセント論」『岩波講座日本語 5 音韻』 岩波書店. 323-360.
- 平子達也 (2017) 「外輪式アクセントの歴史的な位置づけについて」『アジア・アフリカ言語文化研究』 94. 259-

276.

- 平子達也・五十嵐陽介 (2014) 「大分県杵築市方言の名詞アクセント資料とその歴史的考察」『京都大学言語学
研究』33. 197-228.
- 平子達也・五十嵐陽介 (2016) 「佐賀県中南部諸方言の二型アクセントについて」『実践国文学』89. 107-69.
- 平山輝男 (1960) 『全国アクセント辞典』東京堂出版.
- 広戸惇・大原孝道 (1953) 『山陰地方のアクセント』報光社.
- 福井玲 (2016) “Accent Shift in Korean and Japanese” a paper presented at ILCAA, Japanese and Korean accent :
diachrony, reconstruction and typology. 2 July 2016.
- ポリワールノフ, エフゲニー・ドミトリエヴィチ (1976) 『日本語研究』(村山七郎訳) 弘文堂.
- 松森晶子 (2000) 「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発——沖永良部島の調査から——」『音声研究』
4 (1). 61-71.
- 松森晶子 (2016) 「声調言語としての宮古祖語—特にそのTBUとして機能する韻律上の単位について—」
- 田窪行則, ジョン・ホイットマン, 平子達也 (編) 『琉球諸語と古代日本語』くろしお出版. 145-165.
- 屋名池誠 (2004) 「平安時代京都方言のアクセント活用」『音声研究』8 (2). 46-57.
- 山梨県早川町奈良田の方言「いずこに—小西いずみによる日本語と日本語方言の情報庫」
<https://home.hiroshima-u.ac.jp/ikonishi/narada/narada.html> (2019年11月17日閲覧)